

唐木順三著

「無常」

岡本彦一

九〇

哲学者が、日本文芸について論じた著述はいろいろあるが、九鬼周造「いきの構造」、大西克礼「幽玄とあはれ」・「風雅論」などは、日本の文芸理念が研究の対象として取りあげられて、幽玄だとか、あはれだとかが、一種流行のようになっていたときに出版された。久松潜一「日本文学評論史」に載せてある論文目録によれば、久松氏の論文「鎌倉時代の歌論―幽玄有心の歌論」(新潮社日本文学講座、昭和二年十一月)というのがあり、「『まこと』に就いて」(東京帝国大学新聞、昭和四年七月)、「幽玄論の変遷の一動機」(東京朝日新聞、昭和五年一月)、「『さび』の理念」(東京帝大新聞、昭和六年六月)と

いうのが見える。これらが文芸理念研究の早いところであろうか。昭和十年前後がこうした方面の研究が活潑であったところのようである。「いきの構造」は昭和五年刊、「幽玄とあはれ」、「風雅論」はそれぞれ昭和十四年、十五年刊であるから、文芸理念研究の一つの時期のさががけ・しんがりをつとめたところの哲学者側からの著述と見られる。これらは国文学者の研究では見られない清新な、するどい、そして緻密な研究で、国文学界からの論述とは、全くかけはなれた感じのするものであった。思索のきびしさ、深さが国文学界にはないものであったからである。

これと似たようなことは、和辻哲郎「日本精神史研究」、「続日本精神史研究」、阿部次郎「徳川時代の社会と文学」などにもあつた。両者とも独自の立場から、独自の方法で切りこんだもので、ともに大正時代的な匂いの強いものだが、国文学の世界にはないものを提供した。そして、当時、国文学界では高くは評価されなかつたというより、むしろ評価を遠慮されたかの傾があつたようだ。

ここに取りあげた、唐木順三「無常」も、いえば、同様の線上にあらわれた著述と見てよい。同様とは哲学者側からの、独自の、するどい研究という意であつて、日本文学研究の側から敬して遠ざけられるであろうという意味ではない。

唐木氏の著述目録を見ると、「現代日本文学序説」、「近代日本文学の展開」、「鷗外の精神」と戦前は近現代ものであり、戦後もこうした作品がつついてきたが、「詩とデカダンス」あたりから、著者の目がむかしに向いてきたものではなからうか。わたしが感心して読ませてもらった

のは「中世の文学」からである。この著者は大へんな名著であると思うが、著者の古典の扱い方というか、狭くいえば「無常」のもつスタイルというか、そういうものは、この「中世の文学」のときにくてきたものと思われる。この著は、中世の文学の展開を、すぎ・すぎ・さびとしめて捉えたものであつた。この理念に対応する作者は、鴨長明、兼好、世阿弥・芭蕉という線であつた。「無常」においてははかなしから無常へという捉え方となり、平安中期以後の女流作家においてはかなしを語り、ついで今昔物語集等によつて「兵」を登場させ、男の世界に転じ、中世の仏教者から兼好・連歌師に無常をさぐるという次第となる。時間的な展開の相において理念を定着させようとするやり方であつた。こうした図式化的のみごとしにわたしは感心し、そして、そのうちになにか不満を覚えてくる。その不満というのは、まだ何であるか、はつきりとはせぬわけだが、おもひに、割り切りすぎた「はかなさ」ではなからう

か。由来、わたしは、割つたときの余りとか、同類項を括り出したときの括弧のなかに残るものとかに関心をもち、図式は美しい、筋はなるほど正確だ。それはまことにそうであろう。それはそれとして納得する。けれども、捨てられたもの、主流を構成し得なかつたものに、貴重なものがなかつたか。それらをもう一度丁寧に調べてみたいのである。そういうことをわたしは常々思つている。

話が脇道にきれ込んでしまつたようだから、本筋にもどそう。著者は「中世の文学」から「無常」にやつてくるまでの間に、「無用者の系譜」と「中世から近世へ」という仕事をした。「無用者の系譜」は、在原業平、一遍上人とその周辺、連歌師・俳諧師、江戸の文人をおつて永井荷風にいたる線を論じているわけだ。「中世から近世へ」は雑多な論集といえるが、「中世の文学」のいき方で論じた数編と、梅宮・桂関係の論と、鎖国・キリシタン・外国人のみた日本の論との三部分に大別できる。このうち、わたしには梅

宮・桂関係の三論文がおもしろかつた。すなわち、「梅宮寛書」、「江戸初期における裝飾過多の傾向について」、「桂、修学院両離宮構想の背景」である。本の題ではないが、中世から近世への転回軸にたつ処である。著者の著述をあげつらつて勝手きままなことを述べてきたが、この「無用者の系譜」と「中世から近世へ」のなかに、すでに「無常」の芽生えが見てとれるのである。一遍の一切捨離、中世の宗教・文学・芸術の扱い方にほの見えないであろうか。まこと、「無常」の「あとがき」をみると、「無常といふことをややまとめて書いてみたいと、三年ほど前から考へてゐた」とある。「無用者の系譜」は三十五年刊、「中世から近世へ」三十六年刊である。

「中世の文学」以後の三著と、「無常」との外形的な大きな違いは、前者がすべて論集であつたのに対して、後者は始めから意図して書かれた、まとまつた、書きおろしの著述であることである。「これが本になつて、世に出る頃、私は還曆

を迎へることになる。六十年といふ歳月の凝縮がこの「書」ということばが「あとがき」に見えるし、また、胃の手術をして後の思わしくない体調にもかかわらず、読んで書き、書いては考え、考えはまた読むという三ヶ月半の難行の末になつたのが本書であるというようにも書いてある。著者としてはいろいろな意味で記念すべき本にちがいない。

このへんで著者の思索の跡をたどつてみよう。まず、「はかなし」から出発する。「かげろふの日記」では、道綱の母のなげきの中に、世の中、つまり男と女との仲において「男性の『はか』と女性の『はか』との進み具合、はかどりかたのテンポのずれ」にはかなしを見出してゐる。「紫式部日記」になると、はかなしの受けとり方は「道綱の母のそれとくらべて、一層普遍的、また根本的であつた」というのは「凡そ人生そのものが、はかなきものに見えた」のである。源氏物語の「宇治十帖」では、源氏にある「あはれ」を「はかなき存在」への同感、感

情移入が、『あはれ』ではないかと思ふと考へている。「和泉式部日記」にすむと、「自分をふくめた世の中、人の世の底に、うつるなもの、無意味、空虚が、半分顔のをぞかせている。虚無感とまではいはないが、それに近いものがある」とし、「はかなし」にある、死、無、無痕跡というようなものが、この日記において、王朝女性的な捉え方としては、一応、あらわになつて来たと考察している。

こうして、「王朝の宮廷的、女性的な心理や感情では、どうにも始末に負へないやうな事態が現実に出てきて、この事態に対応する言葉を求めながら、急には果しえずに、なほ旧来の『はかなし』に頼つてゐたが、『常ならぬ世』といふ、これも王朝期にかなり多く使はれてゐる言葉、仏教的色彩をもつた言葉と結びつき、『常ならぬ世』を、自身で、具体的に、実感的に体験した人々、現実の事態の当事者としての男性によつて、『無常』といふ言葉が、おのづからに生み出されてきた」ということになる。ここに「兵

の登場」があるわけである。それは保元・平治の物語であり、今昔物語の話である。さらに、王朝末、鎌倉初期の「建礼門院右京大夫集」にいたると、「この世のはかなき、常なきを、事実として体験し」、「もはやそれを心理や情緒としてとやかく」というところをこえ、「人間心理を超えて、その裸形を示してきた」と捉へ、「そこにはもはや王朝風の『はかなし』の情趣は通用しない」と断じている。

かくして、「無常」に入るわけだが、まず法然の生きた時代が、はかなしそのもの、無常そのもので、はかなしとも無常とも感ずる心理も感情も、その能力を失つた時代と提示する。ついで、恵心、法然、親鸞について、浄土と穢土が語られ、さらに一遍上人におよんで、一切捨離、すべてを捨てる捨聖が語られ、これを結ぶかのように「無常を語る場合、きはだつて雄弁になり、それを書く場合、特に美文調になるといふ傾向がきはめて顕著であるといふことが、日本人のひとつの特徴といつてよいだらう」という間

題をとりあげ、「私は無常を語つて雄弁であるといふことは、無常に親和を感じるといふ特性と、それと、たとへば色即空といふ仏教の語彙とが結びついた結果のものだらうと考へてゐる」という方向で論じている。

こうして南北朝から室町期に入り、兼好のなかに、長明にあつた詠嘆的無常觀から出發して、自覺的な無常觀に達するまでを吟味し、ついで、連歌の心敬・宗祇から俳諧の芭蕉への系譜において飛花落葉の世界をさぐつて終る。

最後は道元である。これについては「あとがき」に「私がいちばん書きたいと思ひ、また力を入れ、苦勞したのは、道元を扱つた『無常の形而上学』である。無常を觀じ思つて、道心を發し菩提を求めるといふ、普通のところから出發した道元が、つひに無常そのものを究め尽し、『無常仏性』にまで至つたそのことを私は書き尽したかつた。無常を、ありきたりの無常感や無常觀から解き放して、即ち心理や情緒や詠嘆や認識から解き放し

て、まさに無常そのもの、もののリアリティにいたりつくした『無常の形而上学』を書きたかつた」とある。わたしには、この道元はむつかしかつた。「はかなし」と「無常」とは扱われている素材がもつとも文藝的な作品であつたし、また、著者がいかに哲学的思索を試みて、そこには文芸が大切につつまこまれていた。

いや、本当の意味で文芸が生かされていた。ところが「無常の形而上学」は哲学的世界である。田辺哲学に源を發する著者の哲学的把握が実行されている。著者の扱つた道元には、はやく和辻哲郎の道元（『日本精神史研究』所収）があり、田辺元「正法眼蔵の哲学私観」があつた。後者もむつかしい本であつた記憶がある。そもそも「正法眼蔵」そのものが難解な本である。最近では、道元研究が盛んであつて、仏教方面からのみならず、文学側からもしだいに開拓されているようであるが、あの文体にくいついてゆくに相当な覚悟がいるものと思う。いや、難解さの事はともあれ、著者は「中世の

文学」においても、道元について論ずるところがあつたし、本書でもいちばん力を入れたのはこれであることはさきに記した。著者にはもつとも恰好な題目であるだろうとはわたしも思う。だが、今回ここで著者の道元について語る力はわたしにはない。

ところで、無常の研究については、著者も『無常』については、既に多くの人が書いてゐる。そしてそのために、一種の教科書的概念が出来上つて、通俗化し、その深い内容を見失つてしまつたと、まつさういへる」と書いている。無常研究の一二をあげると、木藤才藏「無常感と文学の問題——その歴史的考察」（『国語と国文学』二十四年二月）は平安末と鎌倉期を概観したあと、心敬の場合を詳述し、宗祇、芭蕉までを論じている。唐木氏が飛花落葉で扱つているのと同じ時期の研究である。また、菊地良一「無常の系譜」（『文学』三十二年三月）は、無常の文学的發想を女流日記の自照的な苦惱に見出し、愚管抄におよび、ついで、平家物

語、さらに俊頼、西行、長明という隠者の無常が古代的な否定意識のそれであり、古代と中世の結節点にたつことを考へ、最後に、中世無常の決定版の成立を道元と兼好とについてみ、これが中世的肯定意識にたつ無常であり、中世無常の一つの到達点であるという論であつた。行論の深淺、簡粗はともかく、唐木氏の構想と相似た大綱はここに示されている。松本新八郎「徒然草 その無常について」(文学、三十三年一月)は本書に於て論じられているが、同じくこの号に掲載されている小山敦子「徒然草の原形とその成立」、林瑞栄、兼好伝の一資料について」は、本書の徒然草の論のところには関係ふかい。なお最近の研究文献をあげる。

三十八年

平家物語の無常観と現実肯定 門前真一

天理大学学報2号

三十七年

無常観というもの 井手恒雄 香椎瀧

8号

無常の思想 森山重雄 文学 8月

続飛花落葉の文学 中川徳之助 国文学

28号

平家物語の思想 永積安明 文学 8月

三十六年

無常観の教材について 山口正 解釈

2号

三十五年

平家物語の無常序説 谷宏 国語と国文学 4月

4月

中世文芸における無常観 桐原徳重 国語と国文学 7月

語と国文学

飛花落葉の文学 中川徳之助 国文学放

23号

花山院の「花見る人」の歌 井手恒雄

語文研究 10号

三十四年

日本文芸史における無常観の克服 井手

恒雄 世界書院刊

無常感の文学 小林智昭 弘文堂刊

日本古典の仏教的精神 村田昇 一橋書

房刊

無常観 亀井勝一郎 日本文化研究 第

3卷 新潮社刊

平家物語における時間認識の問題 大野

順一 文芸研究 6号

無常観・無常感 井手恒雄 文芸と思想

18号

(無常)唐木順三著 筑摩書房 三十九年

二月 四六判 三五四頁 五八〇円)